

日比谷公園から 東京オペラシティへ ——まちづくりの多くの方々との 出会いの中での音楽体験の幸せ

株式会社アイ・オー・エム 代表取締役社長
村中 弘二



東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第26回は1995年の東京オペラシティ建設運営協議会で事務局長を務められ、初台地域と劇場・コンサートホールの交流に尽力された村中弘二様。クラシック音楽との出会いから、東京オペラシティ コンサートホールの建設準備で見聞を広められた貴重なご経験を綴ってくださいました。

昭和30年(1955年)師走のある晴れた午後、次姉と落ち合い歩き出した途端見知らぬ男女から声をかけられた。「急に行けなくなりました。どうぞお使い下さい」——日比谷公会堂オペラ『イル・トロヴァトーレ』——私の幸運なクラシック体験の始まりであった。

昭和34年日本生命に入社、同38年東京勤務となり東京オペラシティ担当として平成元年ヨーロッパ劇場都市巡りに参加、ロンドン、アムステルダム、ウィーン、ミラノ、ミュンヘン、フランクフルトと巡り、本物の「聴く」は勿論、バックヤードの数々の仕掛けを学んだことは貴重な体験だった。

東京フィルとの出会いの中で記憶に残る最たるものは平成4年11月30日東京オペラシティ起工式祝賀パーティー、渡邊一正指揮ヴェルディ『乾杯の歌』。京王プラザホテル祝賀会場で、喜びにあふれる笑顔、互いに握手し肩たたき、参加者全員感動を共にした。

平成7年9月24日60歳の誕生日、武満徹氏の主宰する八ヶ岳音

加賀の先祖が代々眺め拝んだ白山ゆかりの
八王子・白山神社境内にて——妻と



楽祭に、それまでお世話になった方々60余人と参加、「秋庭歌一具」を聴いた。その3年前はじめて軽井沢のお仕事場を訪ね東京オペラシティ コンサートホールの芸術監督をお願いして以来の短い期間であったが、真摯に時には厳しく時には優しく、二十世紀を代表する世界的大芸術家が私どもに接して下さった。その翌年急逝された事は誠に悔やまれる限りであった。

なお東京オペラシティ コンサートホールは「タケミツメモリアル」の名を冠して氏を永らく後世に伝える事としている。

今秋11月8日(金)は、昨年に続き東京フィル「平日の午後のコンサート」での円光寺雅彦指揮とピアノ清塚信也を楽しみにしている。

この4月には新国立劇場のバレエ『ラ・バヤデール』をママ(ワイフ)と鑑賞した。

令和8年3月にはブルーサファイア婚(65年)となる。無事迎えることが出来れば、子供たちを呼んでテレマンの『桌上的音楽』(ターフェルムジーク)をバックに慶びを分かち合えればと願っている。

村中弘二(むらなか・ひろじ) / 1935年弘前市生まれ。1959年東京大学法学部卒業。日本生命保険相互会社入社。1990年から1995年 東京オペラシティ建設運営協議会事務局長、調整会議(新国立劇場一民間街区)事務局長。1996年(株)アイ・オー・エム設立 代表取締役就任。現在に至る。

まちづくりの多様な経験を「文化と街づくり(情報と文化の街 新都心新宿/アン物語)」「夢 つかはず文化・まちづくり」として著作にまとめている。(株)アイ・オー・エムとして梅澤颯人著「サッカーの老年語り部語録」も編集発行。